

報告**市内中心部で星空観望会****～徳島市内の天体観望会と街の活性化～**

伏見賢一、依岡隆児、石田和之（徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部）、岡部修典、後藤強、西澤裕爾（徳島大学大学院総合科学教育部）、小田大輔（(社)まちづくり役場）、徳島大学天文部アストロラブ

1. はじめに

徳島市中心部における最微光等級は 2.0 等程度である。市の人口は約 26 万 5 千人[1]の地方都市である。しかし、最微光等級に関しては大都市並みである。徳島市内中心部の最微光等級は 2.5 等、徳島大学の常三島キャンパスは徳島駅から 1km 離れたところにあるが、最微光等級は 3.0 等である。このような環境で星空観望会を執行した理由は街の活性化である。

徳島市観光協会や商店街振興組合等のの人々と、大学生や教員とがどのように連携して星空を接点にして街を活性化させていく試みを行ったかについて紹介していく。

2. 市内で天体観望会！？

観望会を実施した当初のきっかけは、徳島市観光協会からの依頼であった。2009 年の春から眉山ロープウェイの運転時間が 21 時までに延長されたのをきっかけに、夜間に集客できるイベントができないかとの話であった。

この話を聞いた時の印象は「これは面白いかもしれない」というポジティブな印象であった。大体、街灯やネオンがギラギラ輝いている（徳島のネオン街はかなり賑やかである）ところで望遠鏡を出して星を見るなどという酔狂なことを徳島県人は考えない。なぜなら徳島では車で 30 分も走れば天の川が見られるような自然があるからだ。そんな地域で、街中に望遠鏡を担ぎ出して星を見せたら、通りすがりの人々はどんな反応を示すだろうか、

という興味があった。

徳島市内の中心部で星を見るといった場合にどのような人々をターゲットにするかは簡単に決まった。先にも述べたように、そもそも星が非常に好きな人は空の明るい市内で見ようとは思わない。従って普段は星を見ない、もしくはあまり興味のない人に星を見てもらい、ごく僅かでも興味を持ってもらおうということが一つの目的。もうひとつは、興味はあるけれどもなかなか遠くまで星を見に行くことができない、という人に星を楽しんでもらおうという事を目的とした。そこで、ターゲットには小さな子ども連れの方を想定し、子供向けのイベントを盛り込んだ。

観望会の計画において気をつけたことは、以下の 3 点である。

1. 見栄えの良い天体を見てもらう。
2. 光害の影響が大きい中でも見える天体を見てもらう。
3. 暦やイベントと関連付ける。

天文にちょっと詳しくなるとやれ星雲だ、星団だというのを見せたくなくなってしまうが、こういうのはたとえ暗い空でも見慣れていない人には強い印象を与えられない。とにかく分かりやすい天体を見ていただくことにした。

計画を持ちかけられたのは 4 月だったので、土星と月を見られるような日程を組むことができた。冬には木星をテーマにした観望会を実施した。

3. 日程とプログラム

計画した日程と観望会のテーマ、およびその結果を表1に示す。7月7日には世界天文年2009の公式イベント「全国同時七夕講演会」の公認企画として、広報活動に力を入れた。

表1 観望会実施状況

日程	テーマ	場所	実施状況	参加者数
5/30	月と土星	眉山山頂	曇り・決行	10名
6/27	月と土星	眉山山頂	雨・中止	—
7/7	七夕	眉山山頂	曇り・決行	60名
8/26	旧七夕	眉山山頂	曇り・決行	20名
10/3	仲秋の名月	眉山山頂	晴れ・決行	150名
12/21	月と木星のランデブー	市内中心部	晴れ・決行	20名

4. 実施結果

イベントはかなりの確率で曇ってしまった。天文の経験者ならば星を見ようとは決して思わないような天候にもかかわらず、多数の市民が星を見に来てくれた。

観望会の広報は徳島市の広報誌および新聞のイベント通知で実施した。観望会に来てくれた方に聞いてみたところ、広報誌や新聞を見たという方が多く、眉山山頂という場所では通りすがりの人々はほとんどいない。



図1 観望会の様子

一方、12月21日に開催したイベントでは事前に広報誌などを見て参加した人はわずか5名で、あとはすべて通りすがりの人々であった。

表に示した観望会のうち印象的であった2つのイベント(7月7日、12月21日)について詳しく説明する。

4.1 七夕観望会

7月7日のイベントは、世界天文年2009公式イベント「全国同時七夕講演会」の公認企画として実施した[2]。七夕の物語を小学生や幼稚園児といった低学年の児童に楽しんでもらい、将来天文学者を目指そうと思うこどもを養成することもできないかと思った。まさに「教育は国家百年の計」である。

講演会の開始時刻は18時、観望会は19時30分から20時30分までとした。観望会終了時刻はロープウェイの最終便に間に合うように設定した。

ポスター作製とイベント告知は大学院の学生諸氏に依頼した。授業の一環として広報活動を行い、十分な準備ができた。

当日は夕方まで曇っており、心配されたが月が出るころには所々に晴れ間が見えた。講演会では30名程度の親子が参加した。その後開催された山頂の観望会では50名程度の親子が参加した。かろうじて織姫星と彦星が見えたうえ、観望会途中で月の出を観察することができて参加者は皆喜んでくれた。

4.2 月と木星のランデブー

開催は12月21日、クリスマス直前であった。この時期になると、寒いので屋外のイベントにはなかなか人が集まらない。そのため、屋内の講演会と天体写真解説を行い、その後希望者は徒歩で5分ほど離れた公園で天体観

測に参加するというプログラムにした。タイトルは「月と木星のランデブー ～今宵あなたは誰とランデブー?～」とし、大人を対象にした。

参加者は、前半の講演会ではわずか5名と少なかった。これは、開始時刻を17時30分と早めに設定したため、参加したくても仕事がまだ終わらないという事情があったのではないかと考えられた。後半の観望会では、寒風の中通りがかりの人々や商店街振興組合等の人々が興味深そうに集まってくれた。

5. 一年間の成果と影響

一年間にわたって街の中で天体観望会を実施してきた。その中で最も多く寄せられた声は、「こんなに気軽に星が見られてよかった」というものであった。確かに、専門家はもちろんレベルの高いアマチュアは通常の方法では容易にアクセスしがたい観測地に向いて素晴らしい星空を体験し、観測している。多くの市民が抱く天体観測とは、そのような苦勞を伴うもので、とても手が出ないものである。

街の中で望遠鏡を出して通りがかりの人も含めてみてもらう企画は、予想以上の反響を得た。曇っていても星を見たいという熱意をもって参加される親子連れも多く、将来に希望を抱くことのできる一年間であった。

商店街振興組合等や観光協会からは、街中

で星を見るという意外性のほか、星を見に予想以上の多くの方が集まってくれたことに高い評価をいただき、これからも続けてほしいとの依頼を受けている。街の活性化に学生達が積極的に参加してくれたことを評価していただけた。

6. 謝辞

街の中で天体観望会を実施するにあたり、場所の提供に多大な協力をいただきました徳島市観光協会、徳島市、徳島県、両国本町商店街振興組合の皆様へ感謝します。

一連のイベントは、徳島市観光協会の援助、徳島大学総合科学部の学部長裁量経費「星がみえるまちづくり」の援助を得て実施されました。

文 献

- [1] 徳島市統計資料
- [2] 柴田一成、前原裕之、西田圭佑 (2010) 天文月報, 103 巻 p131

伏見賢一

* * *